

ISSN 0387-6489

常葉学園短期大学 紀要

第 34 号

常葉学園短期大学

2003

目 次

韓国の保育実践の特徴と類型化に関する日韓比較 ……………長崎イク・金田利子・渡邊保博・郷式 徹・サトミ. I. ティラー…………(1)	
アレクセイ・ニコラエヴィッチ・レオンチエフ —生誕100年を記念して—……………百合草 禎 二…………(15)	
アース・ワークスを訪ねて ……………長 橋 秀 樹…………(35)	
コンテンツ管理システムを利用した学習者支援ウェブサイトの構築 ……………市 川 真 矢…………(55)	
家族病理・暴力の現代的構図と刑事法、司法福祉の発達 ……………巻 口 勇一郎…………(71)	
学生のセキュリティー意識と課題 ……………谷 口 真 嗣…………(109)	
本学専任教員・研究活動記録 2002年 ……………(117)	
<hr/>	
宮部みゆき『理由』に見る都市の表象 ……………平 井 修 成…………〔 1 〕	
中国の小鳥前生譚 (二) —追加資料①— ……………繁 原 央…………〔 13 〕	

宮部みゆき『理由』に見る都市の表象

平井修成

キーワード／都市、風景

宮部みゆきの『理由』は、「ヴァンダール千住北ニューシティ」という荒川区にある超高層マンション（億ション）を舞台にした殺人事件を描いたミステリーである。事件解決後に行われた関係者へのインタヴューという形式で、事件の発生からこれに纏わる謎の解明に至る過程が描かれる。ミステリーとしての興味もさることながら、多少なりとも事件に関わった人々の、陰影に富んだ人生模様が次々と浮かび上がってくるところが、作品の大きな魅力になっている。インタヴューの記録という叙述のスタイルは、この魅力を生み出すに、大きな効果をあげているようである。

ところで、後に詳しく述べることになるが、下町にある超高層マンションという舞台設定は、『理由』の物語にとって余り相応しいものとは言えない。しかも、より相応しい舞台は、容易に準備することが出来たはずなのである。

宮部みゆきは、現代屈指のストーリー・テラーであり、『理由』は、宮部作品の中でも、最高傑作の一つと言ってよい。構成の巧みさは、息を呑むばかりである。その『理由』を見渡して、唯一不自然さが認められるのが、この舞台設定であり、しかも不自然さは、いとも易々と克服できるタイプのものなのだ。

では、なぜ下町の超高層マンションという舞台が敢えて選ばれ

たのか。作者が、そしてこの作品を歓迎した多数の読者が、この設定を許した理由は何か。こうした点の考察を通じて、彼等の内に表象されるこの物語の都市の風景の、隠された意味を探ることが、本論の目的である。

一 アイデンティティーの希求とアイデンティティーの不在

ヴァンダール千住北ニューシティは、三棟からなっており、十階建ての中央棟を挟んで、東西に二十五階建ての建物がある。ちなみに、建設業界などでは二十階以上のマンションを超高層マンションと称しているようである（注1）。この東西の二十五階建ては、間違いない「超高層」なのである。事件は、その西側の建物（ウエストタワー）で起こった。二十階にある二〇二五号室から若い男が転落し、室内では三人の男女が殺害されていた。ところが、この死んだ、あるいは殺された四人は、そこに暮らしているはずの家族とは、全くの別人だったのである。

この猟奇的でミステリアスな状況の解明の過程が、『理由』の物語なのだが、最初に述べたように、過程は、幾つもの人生、家族の在り様を明らかにする。

— 1 — アイデンティティを求める者—小糸信治一家

最初に登場するのは、二〇二五号室に暮らしていたはずの、小糸信治一家である。

ここで信治を特徴づけるものは、気の小ささ、成長過程での貧困、「その場しのぎの贅沢」な生活態度、営業マンとしての能力の高さ、である。

信治の妻の静子は、「ご実家が、実は多少の資産家」であり、性格的には非常に虚栄心の強い女性として語られる。

この二人の間に、滝野川学院中等部に通う孝弘という息子がいるが、宮部みゆきの作品がしばしばそうである様に、少年は好感を以て描かれている。つまり、両親の贅沢好きや虚栄心を、彼は受け継いでいない。

ところで、二〇二五号室は分譲時点では一億七千二百二十万円であった。バブル崩壊の中で転売される内に、これが七千二百五十万円に下がり、小糸一家が購入することになる。

『理由』は、朝日新聞夕刊に平成八年九月二日から約一年間連載された。平均株価が頂点に達したのは、平成元年の十二月であり、翌年の秋からは今に続く地価の下落が始まっている。つまり、『理由』の発表時期は、所謂バブル崩壊と呼ばれた期間の中にすっぽりと収まっているのである。億ションが急速に三割近く値下がりするという設定は、だから、時宜にかなったものであった。

この時期、不動産を求めようとする人々の心には、『アンビバレント』な二つの思いが交錯していたはずである。その思いを、『理由』は、弟信治と姉貴子との意見の対立という形で描き出している。

購入資金に困った信治が、貴子に借金を申し込んだ時の、電話での会話を、貴子が回想して語る部分である。

聞いているうちに、呆れるだけでなく、空恐ろしくなってきたしまいました。七千二百五十万円だっていうじゃありませんか。元は億ションだったんだよ、それが七千五百万を切ったんだ、掘り出し物だって、信治がバカみたいに浮かれてるもんですから、わたしは言ってやったんです。一億円だって七千五百万円だって、わたしたち一般庶民にとってはどっちも届かない額のお金だ、掘り出し物だなんて考えること自体が間違ってるって (Pg.20)

気の小さい信治が、なぜ高額の買物をする気になるのか、資産家の娘である妻がいて、なぜ資金繰りに困るのか、作者は慎重に解答を用意している。

やはり、貴子が信治について語った部分である。

信治には気の小さいところがございましてね。せっかちなんです。気が短いからせっかちなんじゃないかと、何か思いつくと、それが本当に上手くいくかどうか、早く確かめないと心配で心配でいてもたってもいられなくなるんですね。(Pg.23)

また、静子は、自分が相続すべき財産を生前贈与の形で受け取り、それを購入資金の一部に充てようとする。しかし、貰うべきものが土地を売った代金で、バブル崩壊後の地価の下落で、予定していた金額にならなかつたとされている。

小糸信治・静子の夫婦は、結局、莫大な借金を背負う形で、その部屋を購入する。ヴァンダール千住北ニューシティは、小糸信治・静子の夫婦の贅沢への志向や虚栄心を刺激し、経済的な危険へと駆り立てるものだったのである。

— 1-2 アイデンティティを求める者—石田直澄

小系信治のローンの支払いが滞り、二〇二五号室が競売にかけられる事態になって、物語に登場してくるのが、石田直澄である。彼は、競売物件である二〇二五号室を買おうとする。その直接の動機となったものは、直澄と息子の直己との口論である。

直己は、集団就職で上京して、自らの努力で会社の中に地位を固めて行った父親を尊敬していた。

石田直己は子供のころ、父の会社での仕事について話を聞くのが好きだった。(P.271)

二十二歳のときに、大型の免許を取得して、配送部車両課へと異動。ここではタンクローリーの運転なども手がける。

移送部門としては会社の花形、血管にあたる存在である。

「何のあてもなく、特技もなく、集団就職で東京へ出てきて、あとは努力努力の人生だった——おかげでとんとん拍子に出世した。そんな話ですよ」

直己はちよつと子供に戻ったような顔で、楽しそうに笑う。

「小さい頃の僕は、そんな父が本当にまぶしく見えて、すごい人だと思っていました。牧歌的な時代でした」(P.272)

しかし、直己の進学に関して、父子は意見が対立し、それが図らずも直澄の社会的な劣等感を顕在化させることになる。

直己は、高校時代、「私立東洋工科大学」の先生が書いた本を読み、その大学への進学を希望する。しかし、東洋工科大学が「ほとんど無名に近い」大学であり、且つ、直己がより難関の大学を狙える成績を得ていたところから、父親は強硬にこれに反対する。

親父に裏切られたような気もした、という。

「バカもん、大学行くなら東大だ、東大がいちばんだ、東洋

工科大なんざクズだ——そんな価値観を、まさか親父が持っているとは思ってなかったんです。(P.280)

そして、直己は、直澄を傷つける言葉を発してしまう。

「いい大学、いい大学って、父さんは人間の価値をそんなところで決めるのかよ、だったら父さんは、自分自身も、自分の会社の仲間も、誰のこともちゃんとした価値ある人間として認めてないんだね？ 実は自分自身のことも、仲間のことも、心のそこではずっと軽蔑して、こんなのくだらねえ人生でくだらねえ生き方でクズみたいなもんだと思ってたわけだ、可哀想な人だね——僕、そう言いました」

石田直澄は、怒りで真っ青になって震えていたという。

その後、直己の妹の由香利との会話でも、(誤解に基づくものであるのだが)劣等感を刺激された直澄は、二〇二五号室を競売で買おうと試みる。子供に残すべき財産を持つことによって、また、高額の不動産を上手に(競売によって安価に)手に入れるという世渡りの巧みさを示すことによって、子供達からの尊敬を勝ち得ようとしたのである。但し、子供達から尊敬されていないというのは直澄の思い過ぎであって、むしろ、そうした思い過ぎが子供達の失望を誘うことになる。

小系夫妻と石田直澄と、具体的な事情は異なるが、心に満たされない思いを抱えており、ヴァンダール千住北ニューシティがその欠落を埋めるものとして彼等の前に立ち現れたという事情は同じである。

— 1-3 アイデンティティなき者—占有屋たち

競売されるマンションを、何とか自分たちのものにして置きた

いと考える小糸夫妻は、早川という不動産屋の勧めに従って、占有屋を二〇二五号室に住まわせることになる。この占有屋四人の内三人が、残りの一人に室内で殺され、殺した一人は転落死することになる。転落死した殺害者とその恋人、占有屋と石田直澄の関わりなど、物語は複雑で非常に興味深い展開を示すが、言及を避ける。ここで問題にしたいのは、占有屋四人の人生である。

占有屋の四人は、彼等を占有屋として雇った早川社長でさえ、家族と信じて疑っていなかった。早川社長は、占有屋の一人、砂川信夫から彼等の住民票を入手していたからである。

この住民票の記載によると、世帯主の砂川信夫は、一九五〇年八月二十九日生まれ。死亡当時は四十五歳ということになる。妻の砂川里子は、一九四八年二月十五日生まれ。夫よりもふたつ年上である。このふたりが、リビングで倒れていた。

そしてふたりのあいだに生まれた長男、砂川毅。一九七四年十一月三日生まれ。死亡当時二十一歳。この毅がペランダから地上に落下して死亡していた青年である。

四人目——早川社長の会話のなかで「婆さん」として登場しているのが、砂川信夫の実母、砂川トメである。六畳間の和室で死亡していた老女である。一九一〇年四月四日生まれの彼女は、死亡当時八十六歳だった。(P.345)

しかし、住民票こそ砂川信夫の家族のものであったが、砂川を除く残りの三人は、全くの別人だったのである。

砂川信夫は、「家族を捨てて家出をして、今年でもう十五年ほど

になるはずだった。」(P.350)。信夫の家出の理由を、信夫の妻である里子(本物)は、「母親のトメを殺したり、トメと一緒に死んだり、トメから逃れるために自分が死んだり、そういう破滅的なことをやらかさないため」(P.350)であったらうと考えている。

信夫の母のトメは、若くして東京近郊の農家に嫁ぐが、舅から性的な関係を強要される。信夫は、夫の子であったが、成長するにつれ舅そっくりになって行った。これが、トメが我が子である信夫を疎んじた理由であり、親子が不仲となった理由なのである。だから、里子は右のように考えたのだ。砂川信夫は、自分の心から安らげる場所を持たずに育った人間なのである。

そして、安らげる場所が無いという点では、砂川信夫が自分の家族と偽っていた他の三人も同様である。

砂川トメを名乗っていた老女は、本名を三田ハツエといい、浜松市の「入園する際の保証金が数千万円にのぼるといふ、高級老人ホーム」(P.350)の入所者であった。彼女は、市内のショッピングモールへ外出した時に窃盗に遭い、犯人に暴行を受けて記憶喪失になり、ホームへ帰ってこなかった。そして、いつの間にか、この疑似家族のグループに加わっていたのである。

三田ハツエが、高級老人ホームに入所したのは、「娘どもがお金を巡って汚い争いをするのをこれ以上見ていたくない」(P.457)からだだった。物語の中では、三田ハツエの娘達が、彼女が行方不明になった直後、老人ホームの入所契約の解除に訪れ、保証金の返還を求めたエピソードが描かれる。一方、娘達の一人が、三田ハツエの子育てが非常に干渉的で独善的なものだったと、ホームの三田ハツエの住む棟の管理責任者であった皆川康子に、訴える

場面もある。こうした複数の視点からする複数の評価は、三田ハツエと娘達との人間関係がどのようなものであったかを、読者に想像させる材料となっている。しかし、作者の狙いは、特定の想像に読者を導くことにあるのではなく、そのような想像の可能性があると、この点にかけて、インタヴェュー形式で叙述されている作品のリァリテイを高めて行くことに置かれているのであろう。

それにしても、三田ハツエが、砂川信夫と同じく、自分の家に安らげる場所を得ていなかったことだけは動かない。しかも彼女は、記憶喪失という形で、さらに深く自己の拠り所を喪つてしまっているのである。

砂川里子を名乗っていた女性は、本名を秋吉勝子と言った。占有屋四人の中では、彼女に関する記述が最も少ない。彼女は、群馬県草津町で「レストランさなえ」を経営する秋吉克之の妹である。秋吉克之は、勝子について、次のように述べている。

わたしもすぐ下の妹も、勝子の男関係のもめ事で死ぬほど苦労しましたからね。あれがそういう女だったことは本当だから。ただ、あれは欲得ずくで動く女じゃなかったんです。情が濃いついていうんですか、血が熱いついていうのか、すぐに男に惚れるわけですよ。それで惚れると、前後の見境もなしに、相手がどんないい加減な男でも、一生懸命尽くしてついでいつちまうんです。(略)勝子をかばうわけじゃないですが、あれは気の優しいところがあって、さつきも言いましたようにものすごく惚れっぽいんですが、そのときそのとき惚れた相手に対しては、本当に一生懸命に尽くすんです。相手の喜ぶように、喜ぶようにと行動するし、服装や化粧はもちろん、

食べ物の好みまで相手にあわせて変わりますからね。(P.433)

(七)

記述量の少なさは、他の三人に較べて、勝子の人生が比較的深刻に設定されていない所為かもしれない。しかし、「相手の喜ぶように、喜ぶようにと行動するし、服装や化粧はもちろん、食べ物の好みまで相手にあわせて変わります」という生き様からは、やはり確固とした自己の場を持ち得ない人間像が窺える。

最後の一人、砂川毅と名乗っていた青年の本名は、八代祐司という。他の三人を殺し、バルコニーから転落死する人物である。

彼は、江戸川区春江町にある「宝食堂」の娘、宝井綾子と関係を持ち子供を産ませている。そして、「宝食堂」を経営する一家、宝井家の描写は、物語の中でかなり大きなウエイトを占めている。これ等の点からも、八代祐司は、他の三人に比して、特別な位置を与えられていると言わなければならない。

ところで、特別な位置、と言う場合、一般にその意味は二つある。一は、彼だけが、そのグループの中で他と異なる立場にいるというものである。もう一つは、彼こそが、そのグループの立場を最も鮮明に示す存在だということである。八代祐司の場合は、明らかに後者で、根無し草のような占有屋の人々の中でも、最も根無し草である人間、そのような立場がもたらす人格的な歪みを、最も強烈に示している人間が、八代祐司なのである。

宝井綾子が弟の康隆に、八代祐司から聞いた彼の生育歴を語る場面がある。

オフクロは淫乱だから、しょっちゅういろんな男とくっつきいちゃあポロポロ子供を産んで、今のところ戸籍にはオレと弟

しかないけど、他にもタネ違いの兄弟や姉妹が何人ぐらいいるか、見当もつかないって。オレだって、ホントに親父とオフクロのあいだの子供かどうかかんないもんだから、親父にさんざつばら殴られたんだって。だけど、オフクロはかばつてもくれなかつたって

それで、中学を出るとすぐに祐司は家出したのだという。

「あいつのお母さん、何をしてたんだろう」という康隆の間に、綾子はこう答えている。

訊いてみたけど、商売女だったっていうだけで、詳しいことは教えてくれなかつたんだ。お母さんのこと口に出すときあの人の顔したら、造作が違つちやつたみたいに歪んでね、口尖らせて、目を光らせて、怖かつたよ

八代祐司こそ、自らの拠るべきものを徹底して持たない人間であつた。彼の人生観は、その人生経験を踏まえて作られている。だから、綾子が妊娠した時、結婚し家族の一員となることを拒否するのである。

「赤ちゃんが産まれるんですよ——あなたの子供ですよ。あなたと血がつながってるのよ。可愛くないの？ 見捨てられるんですか？」

たまりかねたように、敏子がそう呟いた。懇願するような響きがあつた。

(略)

敏子の声に、八代祐司は彼女の顔を見た。そしてつと目をそらした。その一瞬、康隆はわずかな期待を抱いた。彼も心が揺れているのではないかと、敏子の懇願に心が痛んでいるのではないかと、そう感じたから。

だが、現実とは違つた。敏子から顔を背けた八代祐司の目は、強い軽蔑の色が浮かんでいたのだ。

『理由』は、ヴァンダール千住北ニューシティのウエストタワーに、八代祐司の幽霊が出るという噂が立ったエピソードを記して終わる。「なぜ被害者三人ではなく、殺害者の彼の幽霊が出るのか。」(P.58)。その理由を、事件のあつた部屋に間近い二〇二三号室の住人で、事件の最初の目撃者であつた葛西美枝子は、

この人たちにとって、八代祐司は、全然異質の怪物みたいな人間ですよ。本当はそうじゃないんだけど、今はまだそう思っていたいのね。だから、怪物は怪物にふさわしく、死んだら怨霊になつて出てきて、みんなを怖がらせてくれた方が、気分的に安心できるんじゃないかしら

と考えている。「全然異質の怪物みたいな人間」「本当はそうじゃないんだけど、今はまだそう思っていたい」とは、八代祐司の生き様が、人々に共感されるものであると同時に、その共感を意識することが人々にとって苦痛であることを意味している。

八代祐司の孤独と虚無は、固有のものである以上に、時代や社会の象徴であり、その象徴機能の高さに於いて、寄る辺なき占有屋達の頂点を為すと共に、人々を怯えさせずにはおかないものである。

一—4 物語の主題

ヴァンダール千住北ニューシティ・ウエストタワーの二〇二五号室を巡つて、二つのタイプの登場人物達が存在する。一は、その部屋を手に入れようとする者達であり、小糸夫妻や石田直澄がこれに当たる。もう一つは、現にそこに住んでいる者達であり、

占有屋の四人がそうである。前者は、この高級マンションの住人になることによって、自らのアイデンティティを確立しようとする。一方、後者は、現にそこに住んではいるが、アイデンティティを喪失している。

この構図が示唆するものは、人間の欠落感・未充足感は、それを埋めようとする外的な（例えば経済的な）努力によっては、決して埋められないという命題であろう。小糸夫妻も石田直澄も、決して生活に困っていただけではなかった。彼等を不幸にしたのは、よりよい人生や生活についての想像力、言い換えれば、心の中に立ち上る地位や富の幻想なのである。そして、ヴァンダール千住北ニューシティは、その幻想の外化したものとして存在している。

その日は晴天で、北千住の駅のホームに降りると、ヴァンダール千住北ニューシティの東西のタワーが、何か非現実的な門の門柱のように空を区切って立ちはだかっているのが見えた（傍点、引用者）。（P.33）

弟が買おうとしているこのマンションを、自分の目で見ておこうと訪れた時の、小糸貴子の感想である。

さらに、「ヴァンダール千住北ニューシティから北千住の駅まで、特別にあつらえましたとでもいうようにきちんと舗装された化粧タイル貼りの歩道」を見て、『オズの魔法使い』を思い出しましたよ」と、貴子は言う。「あのお話に出てくる、黄色の煉瓦の道だね」。

カンザスに住んでいたドロシーという少女が、竜巻によって「マンチキンの国」へ飛ばされてしまう。このドロシーが、再びカンザスへ帰り着くまでの冒険が、『オズの魔法使い』の物語である。

「黄色の煉瓦の道」は、「マンチキンの国」から「エメラルドの都」に通じている道で、「エメラルドの都」はとても素晴らしいところとして描かれている。しかし、結局、ドロシーはカンザスに帰るためにそこへ行くのだ。

人々は、自らの抛り所を求めて、豪華な超高層マンションに住もうとする。しかし、その努力は、そうしたマンションの存在（が象徴するもの）が人々に意識される以前に、人々が持っていた安らぎを取り戻す努力に過ぎないことを、貴子の使った比喩は示唆している様である。

二 物語の舞台―担わされた意味とその適合性

それが現実に入るかどうかはともかく、豊かさや社会的なステイタス、あるいは人生に対する自信を得ようとして、小糸夫妻や石田直澄は、ヴァンダール千住北ニューシティの住人になるうとしたのであった。

では、ヴァンダール千住北ニューシティは、彼等のそのような欲望を満足させるに、十分な条件を備えているであろうか。確かに、「億ション」である。しかし、我々は、現実と虚構の物語を取り違えるべきではない。

マンションのゴミ捨て場に 小糸孝弘が捨てた新品のラジカセを、八一〇号室に住む篠田いずみという少女が拾おうとするエピソードがある。その頃、小糸家は経済的に追い詰められており、静子は、「よくいう『買い取り屋』というのに関わり、「審査の甘いカードを作って、それを使って電化製品を買ひ込んで、買った品物を物納の形で業者に渡して、換金」するということをしてきた。（P.350）孝弘が捨てたラジカセは、梱包が傷んで買い取ら

せることが不可能になったものだったのである。

ところで、篠田いづみがそれを拾おうとした時、いづみが八一〇号室に住んでいることを彼女の口から聞いた小糸静子は、「ゴミ捨て場を漁るような子供が、このマンションに住んでいるわけがない、嘘つき！」と罵っている。それは、静子にとって、ヴァンダール千住北ニューシティに住むことが社会的地位の象徴と捉えられていたことを、端的に示している。

それにしても、住居がこのような意味を担うのであれば、より適切な住宅が他に存在する様に思われる。それは、一戸建て住宅でもよく、よりファッションブルで高級感のある地域の超高層マンションでもよかつたはずである。現実の人間は、幾つかの条件に制約され、(虚栄心を満足させるといった意味を含めて)理想的な住居を得ることは難しい。しかし、小説なら、こうした条件は本質的に存在しない。

小説にとって必要なのは、庶民が非常な無理をすれば何とか手が届きそうに思える物件で、そこに住むことが社会階層を上がった様に感じさせてくれる住宅である。

石田直澄の母キヌ江は、直澄が二〇二五号室を手に入れようとしているのを知って、「どうせ一戸建てがダメなら、マンションならどこ行つたつてコンクリートの箱なんだから、何も無理して買わなくたって」(P.283)と考えるが、こうした感覚が日本人に一般的であるなら、エンターテインメントとしての性格を強く持つ『理由』(注2)は、なぜこの感覚に沿った設定をしなかつたのだろうか。

また、超高層の億ションという設定をするなら、なぜ北千住にその場所を定めたのだろうか。

日本最初の超高層マンションがどれであるかは、超高層マンションの定義によっても異なってくる(注3)が、「三田綱町パーク・マンション」は間違いなくその候補の一つである。昭和四十六年四月竣工の十九階建てのそれは、ホテルの様なロビー、メイドルームまである住居など、当時一般に分譲されていたマンションの水準を、遙かに凌いでいた。

このマンションの所在地は、東京都港区三田二丁目であり、周囲を慶応大学、同中等部、イタリア、オーストラリア両大使館、綱町三井倶楽部などに囲まれている。東京都内でも、極めてグレイドの高い地域といつてよいであろう。

首都圏の超高層マンションの供給戸数は、注3に引用した『都心回帰と都市再生―東京の再生を目指して』によれば、平成七年から十一年にかけて、漸増傾向を見せながら二千戸弱から四千戸弱の間を推移し、十二年以降、年間一万戸前後の水準に急上昇している(注4)。

『理由』が書かれた時期、そして『理由』に描かれた時期は、「超高層」がまだまだ珍しいものでありながら、庶民の手の届くものになるうとしていた時期と、びたりと一致するのである。

ヴァンダール千住北ニューシティのモデルになったと噂されるものが、荒川区南千住六丁目に建つ「アクロシティ」である。ヴァンダール千住北ニューシティと同じく複数の棟から成っており、その中のアクロシティタワーは三十二階建ての高層棟で、平成四年十月に竣工している。モデルとなった可能性は高い。

一方、この時期には、山の手や銀座に近いウオーター・フロントにも、超高層マンションが続々と建てられている。中央区佃一丁目、新川二丁目に開発された「大川端・リバーシティ21」は、

平成元年から十二年にかけて、三十七階から五十四階といった超高層棟が続々と竣工している。隅田川の観光船の乗客が目を見張るランドマークである。他にも、例えば、平成四年六月には品川区東品川に二十九階建ての「シーフォートタワー」が完成しており、平成六年七月には目黒区三田に「恵比寿ガーデンテラス壱番館」が出来ている。こちらは三十二階建てである。

もし超高層マンションの所在地をハイグレードな印象のある土地にしようと思えば、執筆当時、そのモデルはふんだんに存在したのである(注5)。そうすることは、何ら作品のリアリティを傷つけはしなかったはずである。しかし、宮部みゆきは、北千住にこだわった。なぜか。

三 物語の舞台―虚構の構造

こだわったのである。実は、ヴァンダール千住北ニューシティの場所を設定するために、かなり手の込んだフィクションが組み立てられている。

ヴァンダール千住北ニューシティは、「荒川区栄町三丁目と四丁目にまたがるようにして存在している。」(P.14)とされている。まず「栄町」という町名は、下町ならどこにもありそうで、荒川区には実在しない。それ以上に重要なのは、北千住が荒川区ではないという点である。マンションの名称には「千住北」という語が入っているが、これは「北千住」を強く意識させるものである。しかし、北千住は、所在地の荒川区ではなく、隣接する足立区の地名である。ちなみに、「千住北」という地名は存在しない。小糸貴子がヴァンダール千住北ニューシティを訪れる場面で

は、「北千住の駅のホームに降りると、ヴァンダール千住北ニューシティの東西のタワーが(略)見えた」とあり、マンションの最寄り駅が北千住駅であることが示唆されている。また、「ヴァンダール千住北ニューシティから北千住の駅まで、特別にあつらえました」というようにきちんと舗装された化粧タイル貼りの歩道」があるというのである。

北千住駅から荒川区へ、例えばアクロシティへ行くためには、隅田川を渡る必要がある。しかし、貴子が川を渡る記述はない。さらに、この附近に「フラワールード」(P.5)と通称される商店街があったことになっているが、「フラワールード」という呼称は江戸川区南小岩に存在する。

荒川、足立、江戸川といった下町の地理的实际を巧みに再構成して作り上げた虚構の空間が、ヴァンダール千住北ニューシティとその周辺ということになるのである。

もちろん、小説として、こうした虚構の方法は珍しいものではない。例えば、高樹のぶ子の『彩雲の峰』は、美術館の管理者の男性と絵本作家の女性の恋、さらには絵本作家を慕う十七歳の美少女の姿を、八ヶ岳南麓のリゾート地を舞台に描いているが、そこでは実在の場所と架空の土地とが、見事に組み合わせられて物語の空間となっている。

しかし、『彩雲の峰』と『理由』の決定的な違いは、前者にとつて創り出された空間が必然的なものであったのに対し、後者では空間は物語の場としての必然性が希薄であるという点である。美術の仕事に携わる男と絵本作家の恋には、別荘や文化的な施設の点在する美しい高原がふさわしい。一方、社会的に高い地位の象徴として求められるには、かつては所謂赤線もあつた北千住は、

適切な場所ではない。しかも、既に述べた様に、より適切な場所を他に求めることは、容易だったのである。

四 風景の持つ意味

ヴァンダール千住北ニューシティが北千住の町にそそり立つ理由は、物語の合理的要請とは別に、考えられなければならない。結論を先取りして言えば、その風景は、作品の主題の隠喩として存在しているのである。風景が、人間的な出来事に関連づけられる場合がある。かつては、それは信仰の領域の出来事であった。大洪水は人々の墮落に対する、火山の噴火は悪政に対する、神の怒りであった。今日では、虚構の中でのみ、風景と人生は関連づけられる。失恋の少女には雨が降り、友情の回復の場には夕日が輝く。

ヴァンダール千住北ニューシティへ向かう道路の両脇には、モルタルの古い一戸建てや、錆びた外階段に鉢植えをぶら下げた共同アパートや、作業着や軍手を並べたトタン屋根の店や、草ぼうぼうに茂った空き地が見える。ヴァンダール千住北ニューシティは、景気の急落に翻弄され疲れ果てた工場町が見る夢のなかの理想の姿のように、低い屋根と電信柱の連なりの上に、あくまでも清潔にそそりたっていた。(Pg4)

小糸貴子が最初に訪れた場面で、古い町並みとヴァンダール千住北ニューシティとは、右の様に対比的に描かれている。この対比こそ、小糸夫妻や石田直澄が、心の中に描いていた世界の姿なのではないだろうか。そして彼等は、「古い町並み」から「ニューシティ」へ移り住もうとしたのである。

ところで、ヴァンダール千住北ニューシティの誕生は、当然の事ながら「古い町並み」に波紋をもたらした。

パーク建設は、ニッタイの敷地を買い受けるとすぐに地元住民を集め、すでに稼働し始めていたヴァンダール千住北ニューシティ建設計画について説明した。このころになって、ニッタイ敷地の売却が完了する以前から、ニッタイ周辺の家屋や建物の持ち主に対し、パーク建設から土地買収の申し入れが行われていたことなどが、ぼつぼつと明らかになってきた。

(略)

「さかえフラワーロードの店主のなかにも、買収話の来た土地の地主がいますね。あとで商店街組合のながが採めて大変でした。みんな、他人の儲け話は面白くないからさ」(Pg16)

波紋は、ヴァンダール千住北ニューシティの完成後も続く。

敷地内には、法令の指定に沿って緑地帯が設けられ、児童公園や池や人工の水路が点在する。そこには、栄町一帯の、零細な工場と商店と古びた一戸建て住宅が混在する居住空間から隔絶された、別天地の趣がある。ところがここで、マンション敷地内の緑地や公園を居住民以外にも開放するかどうかという大問題が持ち上がることになった。

「開放せず」の方針をとりたいたパーク建設側と、絶対「開放」を要求する地元民側。(Pg17)

結局、開放に関する方針は「一年ごと、半年ごとに、右に左に揺れ動いた。」

ヴァンダール千住北ニューシティの誕生が、それまで平和に過ごしてきた地域住民の感情を揺さぶることになる。「夢のなかの理

「想の姿」が人々を苛立たせ不幸にしたという点でも、風景は、表象される地位や富の為に不幸になっていった小糸夫妻や石田直澄の心の在り様と重なってくる。

恵比寿や代官山や中央区のウォーター・フロントでは、風景によって、作品の主題を隠喩することは出来なかったに違いない。そうした街は、街そのものが、超高層の億ションと同じ性格を帯びている。それでは、対比的な構図を作り上げることが出来ないのだ。

問題は、隠喩が物語の合理性と衝突するにも関わらず、隠喩が選び取られたという点にある。ハイグレードな印象のある土地の超高層マンションが一戸建てにする方が適切であるのに、対比的な構図を優先させて、それは為されなかった。

幾つかの原因が想像されるであろう。例えば、宮部みゆきは、時代小説である『本所深川ふしぎ草紙』でも、現代を舞台にした『東京下町殺人暮色』でも、下町の風景を愛しげに描いている。

そうした好みが反映されたのだと考えることも出来る。また、作者は、『蒲生邸事件』や『龍は眠る』のような優れたSFの書き手でもある。そして、一九二六年のフリッツ・ラング監督の映画『メトロポリス』がその典型なのだが、SFに描かれる都市は、しばしば階級的な断絶を都市構造として示している。SFに造詣の深い作者が、都市をそのようなものとして捉えることは、あり得ることである。

しかし、これ等は推測に過ぎない。確かに言えることは、『理由』の描き出した風景が物語としての合理性に反するものだったにしても、それが作品の価値をいささかも損なわなかったという点である。古い色褪せた町並みに建つ超高層億ションという構図は、

多数の読者に抵抗なく受け入れられ、というより歓迎されたのだ。ここに描かれた都市の風景は、作品の主題の隠喩であると共に、読者の心の隠喩なのだ。だから、風景は、読者にとって快適なのである。ギリシヤ悲劇が、人生の悲しみを生きる人々にカタルシスをもたらしたように、この過酷な風景は、進歩と変化に不安を強いられ、振り所を求めて彷徨っている現代人に、安らぎをもたらすのである。

宮部みゆきは、振り所に見えるものすら幻影でしかあり得ないという哲学的な命題を、あの疑似家族の四人によって、こっそりと作中に忍ばせてはいる。しかし、束の間の慰めなら、都市へ注ぐ眼差しによって得ることが出来るのだと、告げてもいるのである。

(注)

- 1 社団法人日本住宅建設産業協会のニュースファイル、平成十四年八月二十九日号
<http://www.nichijukyo.or.jp/news/200208/20020829.html>
には「全国で今年以降に建設着手し完成を予定している超高層マンション（20階以上）が10万戸を超えた。」といった記述がある。
- 2 『理由』は、平成十年下半年期の直木賞受賞作品である。言うまでもないことだが、直木賞は大衆文学の発展、新人の発掘をめぐりて設定された賞である。
- 3 米山秀隆「都心回帰と都市再生―東京の再生を目指して」（平成十四年四月 富士通総研経済研究所 研究レポートNo.133）には、1976年に高層マンションが初めて登場して以来」という記

述がある。この場合の高層マンションとは、二十階建て以上のものを指す。

4 同右 図表 6 参照。

5 もちろんアクロシテイに高級感がないわけではない。そこは、平成七年三月三十日に起こった国松警察庁長官狙撃事件の現場であり、氏の居住地でもあった。しかし、『理由』では、「ヴァンダール千住北ニュー・シテイ」について、居住者の社会的地位の高さを、具体的に描いた箇所はない。

6 テキストには、平成十年六月、朝日新聞社発行の単行本を使用した。論中のページ数は、全て同書のものである。

7 『理由』のモデルとなった地域の風景については、ホームページ「宮部みゆき『理由』の舞台を歩く」http://eijyodai.hp.infoseek.co.jp/public_html/eijyou/miyabe-riyuu/riyutop.htmに紹介した。参照していただければ幸いである。

ISSN 0387-6489

常葉学園短期大学 紀要

第 34 号

常葉学園短期大学

2003

目 次

韓国の保育実践の特徴と類型化に関する日韓比較 ……………長崎イク・金田利子・渡邊保博・郷式 徹・サトミ. I. ティラー…………(1)	
アレクセイ・ニコラエヴィッチ・レオンチエフ —生誕100年を記念して—……………百合草 禎 二…………(15)	
アース・ワークスを訪ねて ……………長 橋 秀 樹…………(35)	
コンテンツ管理システムを利用した学習者支援ウェブサイトの構築 ……………市 川 真 矢…………(55)	
家族病理・暴力の現代的構図と刑事法、司法福祉の発達 ……………巻 口 勇一郎…………(71)	
学生のセキュリティー意識と課題 ……………谷 口 真 嗣…………(109)	
本学専任教員・研究活動記録 2002年 ……………(117)	
<hr/>	
宮部みゆき『理由』に見る都市の表象 ……………平 井 修 成…………〔 1 〕	
中国の小鳥前生譚 (二) —追加資料①— ……………繁 原 央…………〔 13 〕	